

Title	プロヴァンスの風景と光景：環境世界と人間
Sub Title	Landscape and spectacles in southern France, Provence environmental world and the human being
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1994
Jtitle	哲學 No.97 (1994. 7) ,p.89- 120
JaLC DOI	
Abstract	In a sense landscape is a proper spectacle of outer world, but it is also a state of mind. We are always involved in landscape-world as well as social world. All people are living in the midst of various landscape-world. Provence in southern France is not only a proper geographical space but also a unique cosmos which is ordered by several rivers, mountains, hills, fields, and la mer Mediterranee. Provence may be called as a unique historical cultural social world and also as a local landscape-world. We can understand Provence as a stage of people's life-long experiences or a everyday life-world. I think identity is in our everyday world-experiences: social experiences, spiritual experiences, and landscape-experiences. Although we can experience some aspects of Provence in every places or corners of this country, also we can find several proper aspects or phases of this Provence in many paintings or works by Cezanne or van Gogh. Provence may be in poems by Rene Char or phrases by Alphonse Daudet. Plaine de la Camargue is in a novel titled Malicroix written by Henri Bosco. Provence may emerge in various perspectives and lived experiences of people or travellers.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000097-0089">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000097-0089</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# プロヴァンスの風景と光景

——環境世界と人間——

山 岸

健\*

## Landscape and Spectacles in Southern France, Provence

—Environmental World and the Human Being—

*Takeshi Yamagishi*

In a sense landscape is a proper spectacle of outer world, but it is also a state of mind. We are always involved in landscape-world as well as social world. All people are living in the midst of various landscape-world.

Provence in southern France is not only a proper geographical space but also a unique cosmos which is ordered by several rivers, mountains, hills, fields, and la mer Méditerranée. Provence may be called as a unique historical cultural social world and also as a local landscape-world. We can understand Provence as a stage of people's life-long experiences or a everyday life-world. I think identity is in our everyday world-experiences: social experiences, spiritual experiences, and landscape-experiences.

Although we can experience some aspects of Provence in every places or corners of this country, also we can find several proper aspects or phases of this Provence in many paintings or works by Cézanne or van Gogh. Provence may be in poems by René Char or phrases by Alphonse Daudet. *Plaine de la Camargue* is in a novel titled *Malicroix* written by Henri Bosco.

Provence may emerge in various perspectives and lived experiences of people or travellers.

\* 慶應義塾大学文学部教授 (社会学)

風景は、私のなかで反射し、人間的になり、自らを思考する。私は  
風景を客体化し、投影し、画布に定着させる……。

セザンヌ

愛すべきプロヴァンスはパルメニデスの昔の / 思想からヘルダーリ  
ンの詩への / 玄旨に満ちた見えざる橋であらうか。

ハイデッガー

社会学の課題は社会，人間社会，人間を理解することにあるが，社会学の視野に大きく広がっているのは社会生活，共同生活，人それぞれの日常生活なのである。こうした生活とともに誰もがそこに生まれて，そこで人生を旅している〈日常的世界〉がクローズ・アップされてくる。日常生活と人生の旅路という視点から私たちは〈環境世界〉を〈日常的世界〉として理解することができるだろう。人と人との日々の交わり，つながり，触れ合いなどにおいて体験されているような社会的世界は生活の場面，場面で独自の社会的現実として立ち現われているが，こうした社会的世界や〈人間的空間〉（サルトル）がふたつとないみごとな風景として体験される場合がある。人と人との相互行為の場面ほど興味深い光景＝スペクタクルはないといってもよいだろう。人物がまわりの風景や風物とひとつになっている場合がある。風景の中心につねに姿を見せるのは人間だということもできるだろう。だが，私たちは人びとのなかで，人びととともに生きているだけではない。私たちの誰もが数えきれないほどさまざまな物や事物のなかで，まことに多種多様な道具や品物や作品や眺望などと一体となって生きているのである。私たちの誰もがいつも，そこで日常生活を営みながら人生を旅している〈環境世界〉，〈日常的世界〉は恒常的に風景的な様相を示しているのである。社会学の出発点には〈風景〉があるように思われる。

私たちの誰もがさまざまな人びとや他者（たち）、また、多種多様な事物や風景などに巻きこまれた状態で日常生活を営んでいるのである。〈風景的世界〉と〈社会的世界〉はほとんど折り重なるような姿で私たちによって体験されているといえるだろう。環境世界の指標、目印、現象といえないような風景はないだろう。人びとの暮らしの姿、土地の歴史、環境世界の様相を私たちはさまざまな風景に見ることができる。人間の存在様相と風土の様相、人びとの生活の歴史的展開様相は大地の相貌に、景觀に、風景に生きているのである。いたるところで人びとの暮らしの姿が、生活の詩や風物詩が、具体的に体験されるのである。人生を旅した人びとの姿や日常生活を営んでいる人びとの姿をさまざまな風景から切り離すことはできないのである。

風景と風土を理解すること、日常生活を理解すること、人間と社会を理解すること、環境世界を理解すること、歴史を理解すること——こうしたそれぞれの理解には一貫性が見られるものと考えたい。風景の中心に姿を見せるのは人間であり、人びとの暮らしだが、道や橋や塔も、また、さまざまな様相を見せている集落や耕地や野も、山なみや丘や河川や海もことごとく風景の要となっているのである。視点と方向（性）によって、アプローチの仕方や距離のとり方などによって、風景体験の様相はまことにさまざまに異なるのである。だが、風景は見ることや眺望や視界に限定されるものではない。風景には音や匂い、香りなどが入ってきているのである。風景とともにクローズ・アップされてくるのは、人びとがそこで生きている歴史的で風土的な環境世界、人びとの暮らしと人それぞれの生活史およびアイデンティティ、光と風、宇宙的自然、大地、土地、地方、空間、場所、時間などなのである。

誰もが日々、たえまなしのさまざまな体験のさなかで、錯綜した複雑にからみ合った体験の渦中で人生を旅しつづけている。私たちの生活史はまことに多種多様な体験によって織り上げられており、こうした体験によっ

て方向づけられている。人それぞれのアイデンティティ（存在証明、自己同一性、私がこの私自身であること）には人と人との出会いと交わりに見られるような社会的体験も、また、精神的体験も入っているが、風景体験も入っているのである。どのような風景を体験したかということは決してささいなことではない。道具体験、言語体験といういい方もある。体験と体験との連関性と統合によって意味づけられた現実が立ち現われるのである。切り離された体験は宙に浮かび漂っているしかない。さまざまな体験こそ私たちの**プラクシス**（行為・実践）と**ポイエーシス**（制作・創造）のいずれにおいても、よりどころとなっているのであり、記憶とイマジネーション、イメージの源泉となっているのである。日々の生活も旅することも世界を体験することだが、こうした世界体験は風景体験とも深く結びついているのである。風景体験や社会的体験は人それぞれのアイデンティティ理解の重要な鍵となっているのである。生活史に密着した人それぞれにとっての〈原風景〉があるといえるだろう。風景体験をないがしろにすることはできないのである。

私たちはここでメルロー＝ポンティが『知覚の現象学』で述べているつぎのような言葉に注目したいと思う（M. メルロー＝ポンティ、竹内芳郎ほか訳『知覚の現象学』2、みすず書房、1974年、209ページ-210ページ、他者と人間的世界）。——「自然が私の人格的生の中心にまでも深く入りこみ、それとからみ合っているのと同様に、さまざまな行動は自然のうちに<sup>くだ</sup>降って行って、文化的世界というかたちでそこに沈澱してゆく。私は単に物理的世界しかもたないわけではないし、単に大地や空気や水からなる環境だけに生きるわけでもなく、自分のまわりに道路や並木、村、街、教会、さまざまな道具、鈴、スプーン、パイプといったものをももっている。こうした対象のそれぞれは、それを役立てる人間の行為の烙印を捺しつけられている。つまり、そのそれぞれが人間性の雰囲気<sup>フレイム</sup>をただよわせているの

であるが、その雰囲気は、問題が砂の上の足跡でしかない場合のように、きわめてわずかな限定しかもたないこともあれば、逆に、私のごく最近空家になった家の中を隅から隅まで歩きまわってみる場合のように、きわめて限定されたものであることもある。(中略) 問題になるのが未知の文明や異質な文明だとしても、廃墟の上に、あるいは私が発見する壊れた器具の上に、あるいはまた私が踏査する風景のうちに、多様な存在の仕方や生き方が認められうるものである。このような場合、文化的世界は両義的ではあるが、しかしそれはすでに現在している。そこには、認識さるべき一つの社会があるのだ。それらの遺跡や風景には、〈客観的精神〉が住みついているのである」。

私たちは手つかずの自然、自然のままの原生的自然はいたるところに見出されるということもできるだろうが、人びとの手がさまざまな仕方に入っている、いわば耕された自然のさなかに誰もが自分の身を置いているということもできるだろう。メルロー＝ポンティのこうした文章に私たちは風景的世界の様相と社会的世界の様相のいずれをも見ることができる。むき出しの自然のなかに身を置きながら生きることは誰にとっても困難なことであり、人びとは人間的な色合いがにじみ出ているような環境世界を構築することに心をくだきつづけてきたのである。客観的精神という言葉で理解されるような風景がいたるところに見出されても少しも不思議とはいえないのである。<sup>(1)</sup>

プラークシス、ポイエーシスというとき、身体や手が、人びとの生活が、また、さまざまな風景が浮かび上がってくる。土地により、場所によって、大地の表情と相貌は微妙に異なるものであり、ときには景観や風景の著しい違いが体験される。風景から目をそらすことはできない。プラークシスもポイエーシスも風景的世界に深く根ざした人間的な営みなのである。

地方＝プロヴァンス、地方のローカル・カラーは大地の相貌や空にも、光や風にも、人びとの日常生活や暮らし方、習俗にも、樹木や草花や建造

物にも、歴史的風土の様相にも、景観や風景にも見られるのである。風景や風土に着目するということは、人びとがそこで生きてきた時間的空間的世界に、人びとの日々の営みにまなざしを向けるということなのだ。誰もが風景に抱かれた状態で、風景に包みこまれた姿で生きているのであり、そうした状態や姿で人生の旅路を歩みつづけているのである。環境世界や風景に注目することがなかったら、私たちは人間や自分自身を理解することができないだろう。つぎのようなフィンクの見解は要点をついているものといえるだろう（新田義弘，小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房，1978年，53ページ，55ページ，III 世界関係と存在理解，オイゲン・フィンク，新田義弘訳。フィンクのこの論文は1968年，ウィーンで開かれた第14回世界哲学会議で報告され，のちにラントグレーベ記念論文集『今日の現象学』（1972年）におさめられた）。——「人間というものは，事物の方から振り返ってみずからを見るのであり，空間にみずからを位置づけ，時間をみずからに引き受け，コスモスや生けるもののなかにみずからの位置を定めるのである。（中略）人間は，労働や戦いや愛や遊戯のなかに生きつつ，みずからの現存在を形成して，存在者の真只中でみずからを整えるのである。人間は自然を地盤にして，彼が世界に滞在するための家を建て，おのれ自身を知りかつおのれ以外の他のいっさいの物を知る物として，事物のもとにみずからを住まわせるのであるが，このような物としての人間は，みずからの自己意識のなかに平穏に安らいでいるのではなく，それどころか不安という刺をもっている。（中略）「世界—劇場」には演技者と切り離されているような観客はいない——ここではあらゆるひとが一緒になって演技している。われわれは世界のなかで世界にやってきて，世界のなかで世界から出てゆく。世界という包括的な方位のなかでのみ，対象がわれわれに会われるのであり，われわれは主観として客観に対峙するのである。われわれは物理的にも精神的にも「囲繞されたもの」であり——多面にわたる世界関係のなかで実存し，みずからをコスモス的に理

解し、コスモスを人間的に理解するのである」。私たちはフランクのこうした視点やアプローチを社会学のジャンルにおいても了解する必要があるだろう。人間の存在様相や世界関係、日常的な世界体験は社会学にとっても不可欠な主題、視点といえるのである。

風景や風土は空間や時間を読み解くための手がかりとなっているのであり、人間理解や人びとの生活の理解にあたっては、風景や風土に注目しないわけにはいかない。風景によって空間は秩序づけられており、意味づけられているのである。さまざまな光と影のなかに風景が姿を見せている。風景は時間的な様相を見せているのである。風景とはある土地や地方や空間を特定の場所たらしめるものであり、環境世界を方向づけたり、意味づけたりすることによって、ふたつとないコスモスを現出させるものなのである。日常生活の舞台や人生の旅路はさまざまな風景によって整えられているのであり、こうした風景によって方向づけられているのである。私たちはフランス語 *SENS* に注目したいと思う。この *SENS* という言葉には感覚、意味といった第一群の意味と方向といった第二群の意味、およそふたとおりの意味がある。自分の手帖に「方向こそ創造的な行為である。それは風景のなかに意味を引き入れることである」と書いた人物がいる。サン＝テグジュペリだ。彼は科学における概念を方向として理解したのである。ものがはっきりと見えるためには秩序づけることが必要となるのである（『サン＝テグジュペリ著作集 4 手帖』宇佐見英治訳、みすず書房、1963 年、104 ページ、参照）。リヨン生まれのサン＝テグジュペリは人間を住まう者と呼ぶ。人間にとっては事物のもつ意味は、家のもつ意味にしたがって別様になるのである。こうしたことを彼はひとつの大いなる真実という。道路、大麦の畝、砂丘の陵線は、それらがひとつの領域をかたちづくるか否かにしたがって、人間にとって異なったものになるのである。こうした言葉が見られる彼の小説『城砦』（1948 年）に私たちは注目したいと思う（『サン＝テグジュペリ著作集 1 城砦 I』山崎庸一郎、栗津則雄訳、



みすず書房，1962 年，33 ページ—34 ページ，参照）。サン＝テグジュペリのパースペクティヴと思想には SENS という言葉が重要な意味をもって入っている。彼の視野には空や雲，大地や道，地球が入ってきている。

ローヌ河とソーヌ河はリヨンで合流し，ローヌ河は地中海をめざして南下している。南フランス，プロヴァンスと呼ばれるフランスの一地方は，ローヌ河によって明確に方向づけられているのである。プロヴァンスに目を向けるととき，アヴィニョンでローヌ河に合流しているデュランス河にも注目したいと思う。こうした河川や地中海によって，また，さまざまな山なみや丘陵によって，ペトラルカゆかりのヴァントゥ山，セザンヌゆかりのサント＝ヴィクトワール山，ローヌ河の河口一帯に広がっているカマルグと呼ばれる平原や地方によって，ゴッホが描いたクローの平原によって，また，さまざまな集落や建造物，道，水の流れ，樹木や草花，岩石，土などによって，光と風によって，プロヴァンスにははっきりとしたかたちが与えられているのである。これらのすべてによってプロヴァンスは意味づけられているのだ。私たちはプロヴァンスをただたんに等質的な広がりを見せている地理的空間として見ることはできない。プロヴァンスはさまざまなパースペクティヴによって方向づけられており，人びとにとっては実存的な広がりを見せているコスモスそのものともいえる独自の世界なのである。地形，地勢，景観，風景，風土のいずれにおいても，プロヴァンスはまことに変化に富んでいる。集落の立地や形態もさまざまに異なっている。プロヴァンスにはローマが入っている。この地はプロヴィンキア（ローマの属州）と呼ばれていたのである。プロヴァンスという名称はプロヴィンキアに由来する。プロヴァンスはフランスの名だたる歴史的空間なのだ。歴史的風土という言葉は太陽と風（ミストラル）とともにあるこのプロヴァンスにおいて特別の重味を持っている。プロヴァンスに近い，地中海に臨む港町，セートに生まれたポール・ヴァレリーはフランスの多様性をしばしば指摘しているが，ここでは特にプロヴァンスをとりあげ，

さまざまな人びとの風景体験、私自身の旅体験などをふまえて、多様なパースペクティヴでこの地方を見ることにしたいと思う<sup>(2)</sup>。

一地方としてのプロヴァンスに目を向けると山々や峰も、山なみも、さまざまな丘や丘陵も、岩山や谷間も、いろいろな水の流れも、多様な野も、バラエティに富んだ道や集落も、ほとんど息つく暇もないような状態で私たちの視界にその姿を現わす。プロヴァンスの空がある。地中海沿岸の風景、カマルグ独特の景観や風景がある。地図を開くと一挙にさまざまな風景が私たちの視野に入ってくるが、セザンヌの絵やゴッホの作品に見られるようなパースペクティヴや、スタイルもある。プロヴァンスを旅して各地に身を置くと私たちはさまざまな光や風を体験することになり、土や石や緑に手で触れることができ、それぞれの現地で雰囲気的世界の立ち現われとそのつどの具体的な風景を体験することができる。風景とはあくまでも具体的で個別的、唯一的なものなのである。

ところで人間を自然からの脱走者と呼んだのはオルテガ・イ・ガセーだが、「狩猟の哲学」と題された論文のなかで、オルテガはさまざまな野に言及している。農場としての野、戦場としての野、観光地としての野、風景としての野、こうしたさまざまな野があるのだが、それらはいずれも純粹の野とはいえないのであり、本当の野に値するのは狩猟の野だけなのである。狩猟においてこそ、人間は野の内にある、野の奥にある、といえるのだ。オルテガは、ヨーロッパでは風景はロマン主義の発明による、という。風景としての野や耕地としての野にあっては、野は人びとの前にあり、人びとはそのなかへ入っていくことはできない。オルテガが見るところでは、原初的で唯一の「自然の」野である狩猟の野においてのみ、人間世界から正真正銘の「外」への移動がなしとげられるのであり、歴史が象徴するのはそうした「外」からの撤退であって、<sup>アナバシス</sup>内陸行にはかならないのだった。オルテガによれば、住むところがどこであろうと、野はそうしたものよりは遙かかなたにあるものなのである。(オルテガ、西沢龍生訳『反文明的考

察』東海大学出版会，1966 年，所収，狩猟の哲学，参照）。自然という言葉はひとつだが，自然と呼ばれるものにはさまざまな様相がうかがわれることに私たちは注目したい。地図でもおおよその見当がつくが，実際にプロヴァンスをまわって見るとまことにさまざまな道が体験されるのである。

プロティノスに由来し，ゲーテに見られ，ユクスキュルにも継承されている〈目と太陽〉という言葉があるが，この言葉は南フランス，プロヴァンスにいかにも似つかわしい。太陽の道と呼ばれる高速道路がプロヴァンスを貫いている。プロヴァンスの太陽，地中海に臨む各地で体験される光がある。プロヴァンスで私たちが目にすることができる日時計がある。光と陰のなかでさまざまな風景が息づいているのである。

カマルグと呼ばれる平原や地方を束ねているように見えるアルル，ゴッホの生活史に姿を見せる都市のひとつだが，ローヌ河をはさむかたちでカマルグの平原とクローの平原が相對している。ゴッホの視野にはカマルグの野もクローの野も入っている。ゴッホが描くクローの野は手入れがいきとどいた耕地となっている野だ。私自身が体験したカマルグは平原，荒地，湿地，沼，湖などが複雑に入り混った，いわば水また水といった独特の景觀が体験された野だった。カマルグを島また島の，ローヌの水の流れと地中海が複雑なかたちで入り混っている土地と呼ぶこともできるだろう。アンリ・ボスコにカマルグ地方を舞台とした『マリクロワ』と題された小説がある。ボスコがこの小説で描いているが，カマルグはあくまでも水と風のなかにある。

『マリクロワ』のあるシーンを見ることにしよう。——「島の尖端，荒々しい水がそこで二つに岐れるその突出部に立って，ぼくの前には水の巨大な拡がりしかなく，風景のすべては，寄せてくるいちめんの水だけで，ぼくはただひとり，その押し寄せる水のまっただなかに身じろぎもせず，そしてその水は，ぼくの足もとで，奔流の増水に圧されて，水位を上げつつあった。（中略）ぼくは水だった。水がぼくの中を通っていた。そしてぼく

はもう島の粘々した土を感じなかった。土はぼくと一緒に、進行する巨大な水塊の下に没し去っていた」。——（こんどはムッシュー・ド・メグルミューに向かってメートロ・ドロミオールが叫ぶように口にした言葉だが）「北から吹く風、アッケシソウの上をどよもし、砂利をもぎ取り、屋根屋根を疲れ切らせ、地面すれすれにうずくまった羊飼小屋の壁を揺るがす、北東風や北西風。<sup>トラル</sup>（中略）<sup>トラモンターヌ</sup>裸き出しの大地や、蒼白な水、そして地平線には、沖合いから波を逆立ててうちよせる、いちめんに泡立ちさわぐ海。すべてが風の掟に身を屈するのだ、水も、草木も、人間も、けものたちも」。 （アンリ・ボスコ、天沢退二郎訳『マリクロワ』新森書房、1990 年、57 ページ、95 ページ）

この小説にはカマルグの風土と風景だけが姿を見せているわけではない。登場人物がいる。家や部屋や暖炉や燭台、ランプなどが私たちの目に入ってくる。居住空間、生活空間、身のまわりが描かれている。ボスコはこうした空間やランプ、火や光に強い関心を示している。家を世界の片隅、コスモス、巢、砦と見たバシュラルがこうしたボスコのさまざまな作品に注目しているが、それは当然のことといえるだろう。ボスコはプロヴァンスのアヴィニョンに生まれている。

陸地と水と島、植物、動物、ところどころで目にすることができる人家、カマルグの風景は独特の様相を見せており、地平線と水平線が錯綜して体験される。カマルグで体験される道がある。カマルグというとき、三つの都市が浮かび上がってくる。エーグ=モルト、サント=マリー=ド=ラ=メール、そしてアルルだ。地中海にこぼれ落ちそうなところにサント=マリー=ド=ラ=メールがある。ゴッホがこの地を訪れており、何点もの作品を残している。カマルグをもってプロヴァンスを代表させることはできないが、ローヌ河の河口地帯ともいべきカマルグぬきでプロヴァンスを理解することはできない。

ゴッホの生活史と画業に目を移すとき、アルル時代と呼ばれる輝かしい一時期が浮かび上がってくる。彼は1888年2月20日から1889年5月8日までアルルで生活した。この時期、ゴッホはプロヴァンスの太陽とともに精力的に制作活動を展開したのだった。彼はカマルグとクローの風景に17世紀のオランダの風景画に見られる風景を見ており、また、プロヴァンスの風景に日本の風景を見出している。弟テオドルに宛てたゴッホの手紙に私たちはつぎのような文面を見ることができる（J. v. ゴッホ-ボンゲル編、裕伊之助訳『ゴッホの手紙（テオドル宛）』岩波文庫、1961年、247ページ—252ページ、第539信）。——「ここの自然は不思議なくらい美しい。どこもかしこも、空の天蓋はすばらしい青だし、太陽は淡い硫黄色に輝いて、ファン・デル・メール・ド・デルフトの絵の中のあの空色と黄色の配合とおなじように、甘く魅力的だ。（中略）ところで、ペトラルカはこのすぐ近くのアヴィニョンに来たのだから、僕はおなじ糸杉やおなじ夾竹桃を見ているわけだ。僕は檸檬<sup>レモン・イエロー</sup>黄とレモン緑を厚く塗って描いた庭園の絵の一枚に、その感じを出そうとしてみた。（中略）テオよ、君がここの糸杉や夾竹桃や太陽を見たら——その日は必ず来るから安心してたまえ——きっと君はもっとあのピュヴィス・ド・シャヴァンヌの《甘美な国》や、その他の絵を想うことだろう。君も知っているような訛を話すこの奇妙な国のタルタラン的な面とドミエ的な面を通じて、ここにはたくさんギリシャ的なものがある。（中略）しかしミストラルが吹く日は、この穏やかな地方もまったく正反対になる。それほどミストラルは神経をいらいらさせるものだ。ところがその埋め合せに、風のない日がまたすばらしい。何という強烈な色彩だ、何という澄み切った空気だ、何という感動的な静けさだろう」。

アルル時代、ゴッホはさまざまなパースペクティブで多様な主題に取り組みながら、光と影、色彩の表現に心をくだしている。プロヴァンスの各地で彼が描いた作品の主題を示すと、おおよそつぎのようになる。たとえ

ば、ひまわり、果物、果樹園、野中の道、ローヌ河が姿を見せている風景、はね橋、タラスコンへの道……また、クローの眺望、アルルの眺望、地中海に臨むサント＝マリー＝ド＝ラ＝メールの苦屋、通り、海景、プロヴァンスの農家、小麦畑、種まく人、さまざまな庭、プロヴァンスの刈り入れ、さまざまな人物画、自画像、編上げ靴や短靴、古い風車小屋、公園、トランクターユ橋、鉄道のガード、レ・ザリスカン、自分の寝室、アルルのカフェ、自分の椅子やゴガンの椅子……そのほか<sup>(3)</sup>。この時期のゴッホの絵を眺めていると〈生活世界〉が私たちの視野に入ってくる。ミレーの絵が私たちの目に浮かぶ。ゴッホは宇宙的自然、大地、生活空間、居住空間、耕地、都市と都市生活、人びとの暮らし、生活者、人生のさまざまな光景などを独特の色彩とタッチで描いたのである。ロマン・ロランはミレーにヘシオドスの詩に比較されるような、また、中世の暦＝カレンダーを思わせる田園生活の詩を見出している（ロマン・ロラン、蛸原徳夫訳『ミレー』岩波文庫、115 ページ、参照）。アルルのゴッホに目を向けると、ミレーの絵も、また、ルーヴル美術館に所蔵されているプッサンの絵画も目に浮かんでくる（*Poussin, 1594-1665, L'été ou Ruth et Booz, 1660-1664, Toile, 1, 18×1, 60 m, Collection de Louis XIV*）。人びとの日常生活のシーン、労働する人びとの姿、農事暦や生活暦、生活の詩～ こうした画家たちの絵に私たちは人びとの暮らしを見ることができる。生活の詩こそ社会学の主題をかたちづくっているのである。

私たちはプロヴァンスの風景や風土をセザンヌやゴッホの絵画に見ることもできる。エクス＝アン＝プロヴァンス、セザンヌの故郷だ。私たちはプラタナス並木がひととき美しい、泉でも知られるエクスを歩き、セザンヌのアトリエを訪れ、さまざまな距離とパースペクティヴで、また、幸いにも間近でも、セザンヌが描いたサント＝ヴィクトワール山を眺めることができた。セザンヌは自分がプロヴァンスのプッサンであることを目標とし、そのことを念願していたのである。

セザンヌについて、ひとつのエピソードがある。ジョワシャン・ガスケの家にセザンヌがやってきたときのことだったが、シャルル・モーラスの小冊子の巻頭に引用されていた「服従はあらゆる進歩の基本である」というオーギュスト・コントの言葉を目にしたセザンヌは、しばらく考えこんでから、こう言ったのだった。「それは本当だ……なんて本当なのだろう」。ガスケはセザンヌを偉大な実証主義者、大地の人（セザンヌは地球の肖像画を描く）、正確な抒情家と呼ぶ。（ここでのガスケとセザンヌについてはつぎの文献による。ジョワシャン・ガスケ，監修 高田博厚，訳 与謝野文子『セザンヌ』求龍堂，昭和 55年，100 ページ—101 ページ，参照，第 1 部，第 3 章）。

セザンヌがガスケに向かって語ったつぎのような言葉がある（同書，184 ページ—185 ページ，第 2 部 彼が私に語ったこと，第 1 章 モチーフ）。——「わがプロヴァンスや，私の想像するギリシアやイタリアという古典的な大国は，光明が精神性を帯びて，風景は鋭い知性のほんのりした笑みのようなものであるくにです。（中略）われわれの頭脳と宇宙が接する場は，色彩です。だから，真の画家たちには色彩が劇性<sup>ドラマ</sup>に満ち満ちて現れるのですよ。あのサント・ヴィクトワール山を見てごらんない。なんという勢い，なんという太陽の激しい渴望，そして晩になってあの重量が全部下りてきたときのなんというメランコリア……あの石の塊は火だったのだ。まだ中に火を秘めている。（中略）遠方の友のように，太陽は私のなかに鈍く浸入しては，私の怠惰をあたため，受胎させる。われわれ（絵と私）は発芽する」。セザンヌが「太陽が沈むとき，それをさまざまな透明さにいたるところまで追ってゆける唯一の眼，唯一の手」と呼んだ画家こそモネだった。印象主義を色彩の視覚混合と呼んだセザンヌだったが，彼はガスケに向かって「実物を写生してのプッサンだ」という。こうした言葉にセザンヌの態度のとり方と願望を見ることができるが，セザンヌは印象主義の伝統の確立を意図していたのである（同書，205 ページ，第 2 部，第 1 章）。セザ

ソヌは絵画を客観化された記憶と呼んでいる。セザンヌが用いた風景の実証主義という言葉に私たちはこのエクスの画家の立場と方法を見ることができる。セザンヌはブッサンをデカルトに対比させている。デカルトにおいては方法とは道に従うことだった。セザンヌにおいては風景は地質学的な基礎に深く根ざしたものとして理解されていたのである。

私は南フランス、プロヴァンスを風景発見の地と呼びたいと思う。たしかにこの地、プロヴァンスはフランスの一地方（プロヴァンス）だが、風景を主題化しようとするときには、ローヌ河の流れや地中海とともにあるプロヴァンス地方は格別に重要な意味を持ってクローズ・アップされてくるのである。私たちはここで一人の人物の名を忘れることはできない。その人の名はペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304-1374), 1336 年 4 月 26 日のことだったが、彼はプロヴァンスの内陸部にその姿を見せしている海拔 2 千メートルに近いヴァントゥウ山に弟をともなって登山し、かねてから念願だった山頂からの眺望を体験したのである。中部イタリア、アレツォに生まれたペトラルカは、運命の手にもてあそばれるような状態で、子どもの頃からアヴィニョンの近郊で暮らし、ほとんどいつもこの風の山=ヴァントゥウ山を目にしていたのだった。この山は広くどこからでも眺められたのである。ペトラルカはかねてからこの名高い山の頂を見ることが望んでいたのである。ペトラルカは風景の発見者という名に価する唯一の人といえるだろう。彼は山頂から向きを変えながら雄大なパノラマそのものというべき風景を体験しただけではなかった。この登山の際、彼はアウグスティヌスの小型版『告白』をたずさえていたが、山頂で気がかかっていた『告白』のページをたまたま開いたところ、第 10 巻第 8 章の言葉が目に入ってきたのである（「人びとは外に出て、山の高い頂、海の巨大な波浪、河川の広大な流れ、広漠たる海原、<sup>せいしん</sup>星辰の運行などに讃嘆し、自己自身のことはなおざりにしている」）。ペトラルカはこうした言葉に強い



衝撃を受け、内なる世界、内面にまなざしを向けるにいたり、沈黙して内省し、深い思いを抱きながら山麓に到達したのである。ペトラルカは中世とルネサンスの境界に身を置いていただけではなかった。風景的世界と内面的で人間的な世界の両方向にまなざしを注いでいる。——「(ペトラルカの胸中にはつぎつぎにさまざまな思いが去来したのだった、筆者注) ……が、ようやく私は、ほかの場所にこそふさわしいこうした物思いを断ち切って、自分が見ようとしてやってきた当のものに関心と視線をむけようと思いました。じっさい、太陽はすでに西にかたむき、山の影は長くのび、はや立ち去るべき時刻<sup>とき</sup>の迫っていることを告げ知らされて、私はわれにかえったかのように、ふりむいて西のほうを眺めたのです。フランスとスペインとの境をなすピレネーの<sup>やまなみ</sup>山脈は、そこからは見わけられません。その間にはなんのさえぎるものもとてなく、ただ人間の視力の弱さのみがわざわざいしているのです。しかし、右手にはリヨン地方の山々、左手にはマルセイユの海や、エーグ・モルトの岸边に打ちよせる白波が、歩くと何日もかかる距離なのに、じつにははっきりと見えるのです。そしてローヌの流れは眼下にあります」<sup>(4)</sup>。ペトラルカのこうした体験とともに、ヴァントゥウ山とプロヴァンスは特別に重要な場所として記憶されてきたのである。

ところでプロヴァンスゆかりの文学者、詩人というならば、フレデリック・ミストラルとルネ・シャールの名が挙げられる。彼らの作品に姿を見せるプロヴァンスの風景がある。プロヴァンスのランドマークというとき、ローヌ河とヴァントゥウ山がただちに指摘されるが、ミストラルやシャールの作品にこの風の山が姿を見せている。ミストラルの『青春の思い出』の第17章は「ヴァントゥウ山の周辺で」と題されている(杉富士雄、ミストラル『青春の思い出』とその研究、福武書店、379ページ—380ページ、第17章)。——「真夜中ごろに、ヴァントゥウ山麓の村ベドワンを出発して、日の出前三十分くらいに頂上に着いた。登山途中のことについては、格別述べることもない。コンブ・フィロールの岩山の急な起伏を、ガイド

が先導する騾馬<sup>らば</sup>の背にまたがって、たいした苦勞もなく登って行くことができたからだ。わたしは雪に蔽われたアルプスの、まばゆいばかりに光り輝く山頂から、太陽が、栄光に包まれた壮麗な帝王のように、おごそかにさしのぼるのを見た。また、ヴァントゥー山が巨大な三角形の影を、広大なコンタ・ヴネサンの平野とローヌ河に、さらに、かなたラングドック地方にまでも、長々と横たえるのを眺めた。そうしている間にも、白い大きな雲がわたしたちの足もとの谷間をいっぱい満たし、それが、もくもくと大きく湧くように移動する。空は限りなく晴れわたっていたが、暑いといった感じはなかった。

今日、私たちはペトラルカのヴァントゥウ山登攀の模様をペトラルカがアウグスティノ会士ディオニジ・ダ・ボルゴ＝サン＝セポルクロにあてて書き記した記録（登攀記）によってうかがい知ることができる。ペトラルカはただならぬさわやかな大気、打ちひらけたみごとな眺望に感動し、茫然として立ちつくしたのだった。ペトラルカの祖国、どこよりも心ひかれるイタリアの方に目を向けると、雪におおわれた峻厳なアルプスの連峰が、実際にはたいへんな距離があるにもかかわらず、間近に迫って見えたのである。

さまざまなプロヴァンスが南フランスのプロヴァンスにある。もちろん、いづこの土地や地方＝プロヴァンスについてもいえることだ。だが、ここ、南フランスのプロヴァンスの風景はみごとといえるほど多彩であり、まことに変化に富み、劇的な様相を呈している。私たちの視野に大きく広がるのはもちろんローヌ河沿いのプロヴァンスであり、地中海沿いのプロヴァンスだ。ローヌ河の河口一帯においては、この水の流れと地中海はたがい手をとらずさえているといってもよいだろう。地図を開くとその河口一帯が地理的に独特の地域であることがただちに分かるが、カマルグ地方を旅すると私たちの視界にある意味では不思議としかいいようがない風景が、つぎつぎに展開する。どこまでが水でどこまでが陸地なのか。大地をどのよ

うに理解すればいいのか。空と大地の境目はどうなっているのか。カマルグでは地平線と水平線は微妙な状態で融合している。野原と湿原と荒地、沼地と池と湖水が混然一体となっているような風景が立ち現われる。人影よりも動植物の方がはっきりと私たちの目に入ってくる。ドーデーの『風車小屋だより』に「カマルグ紀行」と題された文章がおさめられている。(ドーデー、桜田佐訳『風車小屋だより』岩波文庫、203 ページ—204 ページ、カマルグ紀行)。——「耕地を通り過ぎて、いよいよ荒涼たるカマルグの真中に来た。見渡すかぎり、牧場の間に、沼、運河が、<sup>サリコルヌ</sup>厚岸草の中に光る。<sup>タマリー</sup>御柳やあしの茂みが、静かな海面に浮かぶ島のようなものである。高い木はない。広野の平らな、無限のながめをさえぎるものはない。ただ所々、家畜の囲い場が、ほとんど地面とすれすれの低い屋根を広げている。ちりちりになって塩気のある草の上に横たわり、または羊飼いの茶色の<sup>かつば</sup>合羽のまわりに密集して動く羊の群れも、この青い地平線と大きな空とのかぎりない広がりにも縮められて、長い一直線を乱していない。波があっても、一樣に見える海、その海にも似て、この広野から孤独、無限の感じが立ちのぼる。ゆるみなく、妨げるものもなく吹きまくって、その力強い<sup>いぶき</sup>息吹に<sup>ながめ</sup>景色を平らにし、広げるかと思えるミストラルに一層強められて」。

荒涼とした光景がカマルグのいたるところで体験されたが、私たちの視野には美しい自然の風景が入ってきたのである。みごとな野だった。すばらしい水だった。カマルグはさまざまな水と植物、動物によって支えられていた。あるところでは耕地が目に入ったが、カマルグはていねいに耕された土地ではなく、野生の趣と風情が漂っているほとんど原生的ともいえる自然にあふれたところだった。一筋の道がこうした野を貫き走っている。ところどころで人家を目にすることができたが、街道沿いの集落がここで見られるようなところではなかった。原野、水をたっぷりと含んだ大地、さまざまな水面が広々とした風景をかたちづくっていた。私たちはセートからエーグ＝モルトへ、そしてエーグ＝モルトからカマルグのフロント

ともいえるサント=マリー=ド=ラ=メールをめざしたのだった。カマルグの景観と風景を体験しながら私たちは海のサント=マリーに到達したのである。地中海に臨むサント=マリーはいわばカマルグに咲いたひとつの花のように感じられた。人びとの手によって築き上げられた集落、都市、サント=マリー、カマルグとの対比においてサント=マリーを見るとき、人びとが環境世界と風土をどのように生きて固有のコスモスともいふべき風景を築いたかということが明瞭に理解されたのである。サント=マリーはカマルグと地中海の結晶、ランドマークとなっている。

カマルグ地方と比較するならば、プロヴァンス各地の河畔や野や街道沿いや山麓、丘の麓などは細心の注意をもってみごとに整えられており、こまごまとした心くばりをもって耕されているといえるだろう。居住空間、生活空間、大地に住まうこと、環境世界と一体となって人びとが人生を旅していること、工夫をこらし、知恵を働かせて、人びとが生活のステージ、居場所、コスモスを築きつづけてきたこと、ふたつとない世界の片隅が目にはやさしく心ゆたかにかたちづくられていること——こうしたことが南フランスのプロヴァンス地方においてこのうえなくみごとに具体的に体験されたのである。

カマルグの小屋についてドーデーの記述がある。——「あしの屋根、黄色くかわいたあしの壁、これが<sup>カバヌ</sup>小屋だ。獺の集合所はこう呼ばれる。小屋はカマルグふうの建て方で、<sup>てんじょう</sup>天井の高い、広い、窓無しの一室からできている。日光はガラスばりの戸口から取る。これは夕方には板戸で閉ざされる。白灰で白く染めた荒塗りの大きな壁に、刀架が、銃、獲物袋、沼用のくつを待ち受けている。奥の方には<sup>ほんもの</sup>真物の帆柱の<sup>まわり</sup>周囲に五つ六つ<sup>ベルソー</sup>寝台が並べてある。帆柱は地面に立てられて、屋根まで届き、屋根をささえている。夜、ミストラルが吹き、沖の波の音と、波を近づけその響きを運び絶えず<sup>つ</sup>募らせる風の音と一しょに、小屋ぜんたいがきしる時には、船室に寝ているのかと思われる。しかし小屋が美しいのはことに午後である。私はうら

らかな南国の冬の日を、ただ一人、御柳<sup>タマリー</sup>の根がくすぶる大きなだんろのそばで過ごすのが好きだ。ミストラルかトラモンターヌの荒れる中に、戸は踊り、あしは叫ぶ。しかもこれらの動揺は、私を囲む自然の動きの、ごく小さな反響なのである」。(ドーデー、同書、204 ページ—205 ページ) ここに見られるカマルグの小屋の描写はまことに興味深い。窓なしの小屋であり、帆柱の小屋なのだ。火が燃えるところがある。アンリ・ボスコは『マリクロワ』のなかでつぎのような文章を残している(前出、『マリクロワ』269 ページ, 358 ページ, 380 ページ)。——「ぼくの前には、燭台があり、火があり、暖炉の壁があった。壁と、火と、燭台は、一緒に生きていた」。——「ぼくの友は、この家の中心の石を暖めている火だけなのだから。その熱と光とが、ぼくの膝へ、眼のところまで、のぼってくる。これこそ、人間と避難所との間に敬虔に封印された、火と土と魂の古い契約なのだ」。——「ランプは残された唯一の思い出である。いまでもありありと目に浮かぶ。記憶の中で、ランプはあらゆるものの置き換えだ——あの部屋、バランドラン、ぼく自身。ランプこそは、生命の波に置かれた魂のあの燃焼の、空間であり時間である」。ボスコの核心に触れることができるような言葉が展開している。社会学のドラマとスペクタクル、社会学のパースペクティヴ(遠近, 眺望, 視野), 根源的な風景が始まるシーンだ。火と水, 土と石, 大地, 土地, 光と風, 空と星と太陽, 月, 草花, 樹木～さまざまな世界の片隅と局面, 部屋, 家・住居, 集落, 道, 広場, 塔, 建築, 橋, 壁, 日時計～社会学の視点とパースペクティヴにおいて私たちはこうしたそれぞれに注意を向けないわけにはいかないのである。空間的で時間的な広がりの中、さまざまな地方で、土地で、場所で人びとの暮らしが営まれてきたからだ。さまざまな風景の背景に、根底に、中心に人びとの社会生活と人生の旅の姿を見ないわけにはいかないのである。

アルル郊外といってもよいフォンヴィエイユの小高い丘の上にドーデー

の風車小屋はあった。彼の『風車小屋だより』の序に見られる言葉を用いるならば、「プロヴァンス州の中央、ローヌの流域、松と常緑がしの林生せる丘の上の製粉風車」をドーデーが引き取って、そこに居を構えたのである。

眺望がきくみごとな丘だった。ドーデーゆかりの風車小屋に入った。二階にあたるところに小さな開口部があった。風通しのよい原型的な窓だった。この小さな窓からプロヴァンスの風景を展望することができた。風車小屋のこうした窓から展望されるパースペクティヴに〈風景〉理解の鍵を見出すこともできる。枠づけられること、方向づけられることによって風景が生まれるのである。窓とは風景の誕生を促すところのものということもできるだろう。いうまでもなく窓は家の目であり、壁の穴なのである。ドーデー自身はつぎのように書いている（前掲『風車小屋だより』10 ページ、居を構える）。——「ここからなのだ。私が手紙を書いているのは、戸をいっぱいにかけて明るい日光を浴びながら。きれいな松の林が陽にちらちら踊りながら私の前を山の下まで駆けおりている。かなたにはアルピューの峰々が美しい頂を浮きだしている……何の音もない……ただわずかに、時をおいて、木笛の音、ラヴァンドの中にさえずるたいしゃくしぎ、道を行く雌らばの鈴の響き……このプロヴァンス州の美しい景色はすべて光を得てはじめて生きる」。ドーデーの風車小屋はプロヴァンスの数々の観光スポットのひとつとなっている。風車小屋に私たちが見ることができる風景と風がある。ドーデーの丘の風車、その翼は休息の状態にある。プロヴァンス——ドーデーの丘や風車小屋からの眺めもあるし、ヴァントゥウ山からの眺めもある。ところはアヴィニョン、ローヌ河にかかるサン＝ヴェネゼ橋を前景としてはるかかなたにヴァントゥウ山を望むことができるようなすばらしい眺めがある。アヴィニョンのローヌ河畔の風景であり、ローヌの流れにかかってはいるものの、対岸に渡ることができないサン＝ヴェネゼ橋が風景の焦点となっている。かなたのアイ・ストップに姿を見

せているのは、ペトラルカの山なのだ。

社会学者、哲学者、ジンメル、彼の生の哲学においてはヘラクレイトスの生成の哲学、パースペクティヴとパルメニデスの視点とアプローチがからみ合っいっりゆうて見られるのであり、生は溢流として理解されたのである。生の理解そのものともいえるのだが、ジンメルは人間を限界なき限界的存在としてとらえている。ジンメルは、橋は私たちの意志の領域が空間へと拡張されてゆく姿を象徴している、という。橋は風景の両側面を結合するための支点を目にたいして与えるのである。ジンメルは橋と芸術作品の相違に言及している。自然を越え出る綜合作用が橋には見られるのだが、それにもかかわらず橋はやはり自然の風物の一環をなしているのである。芸術作品はあたかも島のような様相を見せているものだが、橋は島にはなりきれない。ジンメルはおしなべて風景のなかの橋は「絵画的」な要素として感じられる、と述べている。橋と扉がジンメルのパースペクティヴのひとつの視点となっている<sup>(5)</sup>。アヴィニョンのサン＝ヴェネゼ橋、旧ローマ法皇庁の建造物、アヴィニョンの広場やプラタナスの通りにも、アルルの広場、アルルの円形劇場、競技場（いずれも古代ローマの遺跡だ）、アルルのプラタナスの通りにも、プロヴァンスがある。市街地においても、田園に見られるさまざまな道の場合でも、プラタナスの並木道が私たちの視界にたえまなしに広がったが、プラタナスの並木道や各地で目にした糸杉やオリーブの樹、アーモンドの樹などにプロヴァンスの風土と風景を見ることができたのである。プラタナスの並木道はプロヴァンスの風景の中核をかたちづくっているといえるだろう。こうした並木道に私たちは太陽を、光と影を見ることができるのだ。プロヴァンスで目にすることができる〈日時計〉とプラタナス並木にプロヴァンスの風土や環境世界の相貌、この地の人びとの暮らしの一端、人びとの生活の歴史を読み取ることができると思う。

水の流れのまわりにあるものは橋に集められて、そうした橋を中心としてそこに固有の風景がかたちづくられる、といったのはハイデッガーだっ

た。彼は住まうことと建てることとに深い連関性を見出している<sup>(6)</sup>。ハイデッガーは人間を命に限りある状態で大地に住まうところの存在、死への存在として理解しているが、こうしたパースペクティヴは社会学のジャンルにおいても十分に考慮されねばならない。社会の理解と人間の理解、日常的世界と日常生活の理解、こうしたそれぞれの理解を切り離すことはできないからだ。住まうこと、旅すること、日々の暮らしを営むこと——これらのいずれもが社会学において主題化されねばならないだろう。風土の理解も、風景の理解も、社会学の視野に当然、入ってくるべき事柄なのである。人生の旅路、私たちそれぞれの日常的な世界体験のいずれもが社会学の主題領域をかたちづくっているのである。

プロヴァンス、アヴィニョンからそれほど離れていないところだが、詩人、ルネ・シャールの生まれ故郷に近いル・トールで開かれたハイデッガーのゼミナールに触れておきたい。ル・トールのある庭でおこなわれたゼミナール、1966年9月5日、この日、ハイデッガーは、まず初めにモットーとしてルネ・シャールの詩句を紹介したのち、ゼミナールを進行させている。——ルネ・シャール〜ル・トールは秀でたり、豎琴の起伏なす己が岩の上に。/そそり立つ鷺の鏡、モン・ヴァントゥウ山は見えり。この日のゼミナールではロゴスが主題化され、パルメニデス、ヘラクレイトスの文脈が取り上げられたのである。9月8日にはル・ルバンケで、9月9日にはレ・ビュスクラでひきつづきゼミナールがおこなわれたが、こうした三つのゼミナールはヘラクレイトスについての三つの対話として理解されるものであり、1966年のル・トールでのゼミナールと呼ばれている。9月9日には参加者はハイデッガーとともにラヴェンデルの香樹の野にあるルネ・シャールの家に集まった。ヘラクレイトスの断片 30、コスモスについての言葉が紹介されたのち、ハイデッガーはコスモスの三つの意味について語っていった。1. 秩序にもたらすという意味に裏づけられたひとつのあり方、2. 輝き、光るもの、3. 飾り、意味はこのように要約されたので



ある。この三重の意味の隠れた統一がヘラクレイトスのいう意味での「世界」をなすのであった。ヘラクレイトスにおいてはコスモスは尽きることなく生ける火、もろもろの節度となって燃え、もろもろの節度となって消える火として理解されていたが、火は燃え上がる炎、孵化する熱、輝く光にほかならないから、一定の観点でコスモスがなぜ火であるかが説明されるのであった。ハイデッガーがルネ・シャールに親近感を抱いていたこと、また、ヘラクレイトスへの真剣なアプローチが見られたことに注目したいと思う<sup>(7)</sup>。

「わたしが生きている間はずっと、わが家の<sup>や</sup>前に、南フランスの山並みが長く横たわって見えることだろう。大波のようにいくえにも起伏した山々、斜面、絶壁、谷間が、朝から日暮れまで濃淡さまざまに青く浮かんで見える。この山並みこそ、ギリシャの大きな岩山のように、オリーブに取り囲まれた山々、栄光と伝統とにみちた望楼、アルピーユの連山なのだ」とミストラルは書いている（前掲、杉富士雄、ミストラル『青春の思い出』とその研究、11 ページ、第 1 章「奉<sup>マース・デュ・ジュー・ジュ</sup>行屋敷」）。ミストラルの『青春の思い出』や『プロヴァンスの少女——ミレイユ——』のページを開くと、プロヴァンスの風景、風物詩、生活の詩がみごとに立ち現われてくる。

私たちはプロヴァンスで〈日時計〉を体験することができるが、ここではつぎのようなメーテルランクの言葉を紹介したいと思う。——「ただ日時計だけが、緑と黄金の季節の壮麗なる時を計るにふさわしい。満ち足りた幸福がそうであるように、日時計は黙して何も語らない。時間は、ちょうど天空を静かに渡ってゆく時のように、日時計の上を黙って歩む」。メーテルランクによれば、振り時計、砂時計、水時計は、形無く表情を持たない抽象的な時間を生み出すのだが、それにたいして、日時計は、青空を飛翔する偉大なる神の翼の打ち震えるまことの影を私たちに示してくれるのである<sup>(8)</sup>。当然のことだが、日時計ほど気まぐれで、はかなく、頼りにならない時計はない、ということもできるだろう。だが、日時計ほど明る

い表情を示す時計はない。光と影のなかで日時計のドラマが体験される。  
 日時計とは太陽そのものなのだ。プロヴァンスの各地は日時計の様相を示しているのである。

アルルには一部、城壁（市壁）が残っており、城壁都市の姿をいくらかではあるがうかがい知ることができる。アヴィニョンは今日でも城壁都市の面影をはっきりと留めている。アルルをカマルグのつけ根にある都市と呼ぶならば、私たちはエーグ＝モルトをカマルグを一方の端で支えている都市と見ることができるだろう。このエーグ＝モルトはまことにみごとな城壁都市であり、要塞のイメージがいまでも濃厚に漂っている。プロヴァンスでは集落は平地や山麓、丘の麓、河畔、ゆるやかな丘陵地帯、谷間のようなところに見られるだけではない。海辺や水際の集落があるし、丘や岩山の上に見られる集落もある。レ・ボー＝ド＝プロヴァンスやゴールドがこうした事例だが、地形と風土に根ざした山上、丘上の集落景観と独特の風景に目が奪われる思いをしない人はいないだろう。プロヴァンスには数々の歴史的な建築、建造物が見出される。たとえば、古代文明の代表的な建造物、ガルドン川にかかっているポン・デュ・ガール、あるいは、セナンクの修道院、アルルのローマ時代の建造物……人びとはまことに多様な空間や場所や風景を築き上げてきたのである。ポン・デュ・ガールは水道橋であり、私たちはこの美しい壮大な建造物に流れていく水、水の道を思い浮かべないわけにはいかないのである。

ルソーゆかりの土地を旅しながら南フランスに入ったホーフマンスタールは、カマルグ地方の風景をエジプトのような風景と呼んでいる。樹木もなく広々とつづく平地の灰緑色、<sup>すみれ</sup> 堇色の光を発しているヒースの茂み、ライラック色の蒼い空、白馬、黒い牛、赤いフラミンゴ……、これがカマルグの風景だった。ホーフマンスタールはカマルグがつきたところから始まる地中海の色をシャバンヌの抜けるような明るい青と呼んでいる。クロード・ロランの<sup>こんじき</sup> 金色の吐息に輝く青ではなく、ブッサンの沈んだ黒ずんだ青

でもなかったのである。ホーフマンスタールの目には内陸のプロヴァンスの風景はギリシャの風景として映ったのだった。黄ばんだ灰色の土地に緑がかった灰色のオリーブの丈の低い林がつづいていたが、彼の目はこうした風景を単調なものにとらえている<sup>(9)</sup>。プロヴァンスを旅して分かったことだが、たしかにこの地ではプラタナスや糸杉やオリーブなどが目についたが、私たちの目にはいたるところで葡萄畑が入ってきた。もちろんプロヴァンスの景観、風景を理解しようとするときには、オリーブや糸杉やプラタナスを挙げないわけにはいかない。セナンク修道院はライラックの畑とともに山間部に、谷間に姿を見せている。プロヴァンスのさまざまな草花や樹木にこの地方を読み解くひとつの手がかりがあることはまちがいない。

和辻哲郎は景観を人間存在のなかの光景として理解している（『倫理学』）。『風土』（1935年）の刊行以前のことだが、ヨーロッパ滞在時、彼はパリを発ち、南フランスを経由してイタリアに向かい、1927年の暮れから翌28年の4月初めまでイタリア各地を旅している。リヴィエラの都市には立ち寄っているが、プロヴァンスの風景に和辻の目はほとんど注がれていない。ジェノアからローマに向かうとき、彼の視野にイタリア独特の風景と風土が広がっている。この旅においても和辻は風土研究の糸口を具体的につかみ始めている。

ジャン・グルニエがプロヴァンスを旅している。パリからの列車をおりたその朝、彼はドン群山の岩山がきりひらく空間を発見して驚嘆している。プロヴァンスの美しい土地がつぎつぎに発見されたのだった。アルル、アヴィニョンがひろげるすばらしい眺めを堅いこぶしのなかに握っているレ・ボー、そしてルールマラン……。だが、私をほんとうに南フランスのふところに入れてくれたのは、アヴィニョンの田舎である、とグルニエが述べている。——「プロヴァンスに結びついた私の友情——親愛感——は、まもなくその風景、その史蹟と合体した。私の精神のなかで、物と存在と

が一体となった。(中略) 人間が人間に結びつくのは、ひたすら築くためである。他の土地では破壊される都市。ところがその都市を設計するのは人間の親愛感である。この土地では、すべての人間が建築家として生まれる。ロマネスク芸術、ルネッサンス芸術は、古代と力をあわせ、人間に精神の重心をとりもどさせる。風景もまた一つの建造物である (建造物 construction という言葉は人々が使いふるしたが、ここでは永遠に新しい)。いまや私は緊密な空にそびえる四角い塔を愛する。それに、糸杉が地面と交えるあの直角のなんという美しさ！<sup>(10)</sup>」

プロヴァンスで天を突くような高い塔を目にすることができるのだろうか。プロヴァンスの各地を旅した私たちは各地でさまざまな塔を眺めることができた。たとえばアルルのサン＝トロフィーム教会の塔、セナック修道院の塔……。アルベール・カミュと親交があり、カミュの師でもあったグルニエの文章にルールマランという地名が出てきているが、プロヴァンスのルールマランはカミュが住んでいた土地であり、いま、彼はそこで眠りにについている。

ペトラルカの生活史をたどるとき、プロヴァンスは彼にとって忘れがたい女性、ラウラの名とともに私たちの視野に広がる。デュランス河との合流点よりももう少し上流でローヌ河に注いでいるローカルな川、ソルグの流れとソルグの丘がラウラとペトラルカのエピソードという点からクローズ・アップされてくる。ペトラルカの詩集『カンツォニエーレ』におさめられている各作品に目を向けるとき、私たちの眼前にプロヴァンスのさまざまな風景が浮かび上がってくる。208 ソネットの初めの節はつぎのように書かれている。——「アルプスの<sup>みなかみ</sup>水脈から 流れゆく急流よ／その名に因む岸边を噛みて かの地へと駆け下る、／昼も夜も思い焦がれる われと共に／われは“<sup>ア</sup>愛”に 汝は“<sup>ス</sup>自然”に運ばれて」288 ソネット、最初の節——「わが吐息の満ちみちる あちこちの<sup>やまなみ</sup>大気、／険しい山脈から 楽しい丘の辺眺めれば／そこはあのひとが 生まれし処 花咲き／実の結

ぶころ わが心臓を手にもちし女が、」このソネット 208 においてはローズ河が姿を見せている。ソネット 288 の陰しい山脈とはヴォークリューズの山をさし、楽しい丘の辺とはヴォークリューズからアヴィニョンに向かって下る丘陵をさしている。1337 年、ペトラルカ 33 歳のとき、彼は静かなヴォークリューズの地に住居を求め、そこに引きこもり、思索にふけり、著述活動に打ちこむようになったのである<sup>(11)</sup>。今日、この地はヴォークリューズの泉として広く知られ、プロヴァンスの観光の一中心地となっている。著名な泉があるところだが、まわりの岩山の景観や樹木、あたり一帯のたたずまい、清流の美しさは息を呑むとしかいいようがない清冽な美しさ、さえわたる美しさだった。

セートに生まれ、地中海と港湾、港町に深い愛着を示した人といえばポール・ヴァレリーだが、彼は「水を讃う」と題された文章のなかでこう書いている。——「水の在るところ、人間が住みつく。<sup>みづみづ</sup>瑞々しい<sup>ニンフ</sup>水の精ほど必須なものがあろうか。「生」が身を据えておのれの周囲を見わたす神聖な地点を<sup>しる</sup>標すのは、<sup>ニンフ</sup>水の精と泉である」。ヴァレリーはあるところで自分の記憶は本質的に一般的感受性のそれであると述べている。風景の場合、ヴァレリー自身は風景全体の構図よりも、むしろ水とか岩とか植物とかいう<sup>マテリエール</sup>物質から強い印象を受けるのだった。どこの湾、どこの入江ということはほとんど気にならないことだったのである。ヴァレリーは大気や光そのものの質に関心を抱いていたのである<sup>(12)</sup>。

ここにオルテガ・イ・ガセーの言葉を掲げておきたい。彼がいう環境とはまわりに見出される風景をさす。対話的生に彼のまなざしが注がれている。

私は私と私の環境である。Yo soy yo y mi circunstancia, .....<sup>(13)</sup>。

私たちにとって風景は風土的環境世界の指標、道標、ランドマークであり、ある土地を特定の土地、場所たらしめるものであって、パースペクティブのあらゆる場面に立ち現われる環境世界の、また、人間存在の、日常生活の様相なのである。誰もが風景に包みこまれるような状態で人生を旅しつづけている。人びとにとって手ごたえがある現実=リアリティ、人びとがそこで生きることができるような日常的世界は社会的な広がりを見せているが、こうした現実と世界は、風景によっても、風景をとおしても、かたちづくられているのである。風景は私たちのアイデンティティと生活史に組み込まれており、人それぞれの個別性と主体性の一部となっているのである。プラークシスとポイエーシスの基盤と道筋、また、人それぞれの記憶は風景によってもかたちづくられているのである。つぎのようなアミエルとホーフマンスタールの言葉には風景理解の手がかりが見出されるように思われる。はじめの言葉はアミエル、つぎがホーフマンスタールだ<sup>(14)</sup>。

何であれある風景は気分である。

さまざまな感情にせよ、いまだ形さだかならぬ気分にせよ、奥深い、きわめて秘やかなぼくらの内面の状態というものはすべて、風景や季節、大気の状態や風のそよぎとじつに不可解きわまりなく絡みあっているのではないだろうか。（中略）ぼくらの自我をぼくらは所有しているわけではない。自我は外から吹き寄せてくる。久しくぼくらを離れていて、そして、かすかな風のそよぎにのってぼくらに戻ってくるのだ。じつにそれが——ぼくらの「自我」なるもの！

その土地に生まれて、そこを人生の旅路としている人、旅人、異邦人、人それぞれのパースペクティブと風景体験がある。どのような旅であろう

と、旅の日々と旅先での風景体験を忘れ去るなどということは私たちにあって容易にできないことだろう。

プロヴァンスは光あふれるところだが、プロヴァンスほど影を必要とする土地はないかもしれない。

### 注

- (1) 客観的精神という言葉にはヘーゲル、そしてディルタイという系譜が見られるが、〈生活世界〉、〈日常的世界〉の研究を進めていく際には、あらためてこの言葉を吟味しながら用いていく必要があると思う。
- (2) 日放ツーリストの企画による南フランスを中心とした旅(〈風景を旅する〉)に幸いにも同行講師として参加し、各地をまわり、貴重な旅の日々を過ごすことができたが、この旅の体験が本稿のなかに入っている。カルカソンヌ～セート～エーグ＝モルト～カマルグ地方～アルル～ドーデの風車小屋(フォンヴィエイユ)～サン＝レミ～レ・ボー～ポン・デュ・ガール～アヴィニョン～ヴァントゥウ山～ヴォークリューズの泉～ゴールド～セナンク修道院～アヴィニョン～ボニュー～シルバカンヌ修道院～エクス＝アン＝プロヴァンス～グルノーブル～シャンペリ(ルソーのレ・シャルメット)～リヨン～パリというコースだった(1994年3月12日～3月22日)

この旅の企画、実施にあたっては、日放ツーリストの加藤あやさんに、また、実際の旅の日々においては、添乗員、藤原ひろみさんにたいへんお世話になった。ここで厚くお礼を申し述べたいと思う。この旅には10名の方々が参加されたが、こうした方々との旅の日々を忘れることなく、これからも〈風景〉へのアプローチをつづけていきたいと思う。

- (3) ゴッホのアルル時代の画業と制作活動については主としてつぎの文献による。ロナルド・ピックヴァンス、二見史郎訳、Van Gogh in Arles, みすず書房、1986年。
- (4) ペトラルカ、近藤恒一編訳『ルネサンス書簡集』岩波文庫、73ページ-74ページ、Ⅲ 自然と人間との再発見。ここで見たアウグスティヌスの言葉は同書、75ページに見られるものである。

私たちの旅のグループがヴァントゥウ山に貸切バスで登ったのは、1994年3月16日のことだった。私たちははるかかなたにアルプスを望むことができたが、ヴァントゥウ山からの各方面の眺めはすばらしいものだった。プロヴァンスの各地からこの山を眺めることができたが、この風の山はプロヴァンスの山なのである。

- (5) 『ジンメル著作集 12』白水社, 1976 年, 37 ページ-38 ページ, 酒田健一訳, 橋と扉.
- (6) Martin Heidegger, Basic Writings from Being and Time (1927) to The Task of Thinking (1964), Edited, with general introduction and introductions to each selection by David Farrell Krell, New York: Harper & Row, Publications, 1976, p. 330, Building Dwelling Thinking (1954).
- (7) 『ハイデッガー全集 別巻1 四つのゼミナール』大橋良介・ハンス・ブロッカルト訳, 創文社, 昭和60年, 1 ル・トールでのゼミナール 1966 年, 参照.
- (8) フランス世紀末文学叢書 XIV『評論・随想集 ジュール・ラフォルグ, モーリス・バレス, マルセル・ブルースト他』曾根元吉編, 国書刊行会, 1990 年, p. 59, ほか, 時計について, モーリス・メーテルランク, 武藤剛史訳.
- (9) 『ホフマンスタール選集 小説 散文 2』河出書房新社, 昭和47年, 301 ページ, 南フランスの印象, 平川祐弘訳.
- (10) J・グルニエ, 井上究一郎訳『孤島』竹内書店新社, 1968 年, 171 ページ, 見れば一目で……——プロヴァンスへの開眼, 原著の出版は1933年のことである.
- (11) ペトラルカ, 池田 廉訳『カンツォニエーレ——俗事詩片——』名古屋大学出版会, 1992 年, 331 ページ, 208 ソネット (第1部), 442 ページ, 288 ソネット (第2部). 巻末のペトラルカ年譜, 参照.
- (12) 『ヴァレリー全集 1 詩集』筑摩書房, 1967 年初版, 1973 年新装版, 1977 年増補版, 483 ページ, 水を讀う, 佐藤正彰訳.  
『ヴァレリー全集 補巻2 補遺 講義・講演 対談』筑摩書房, 1971 年, 325 ページ, 教育について, 佐々木明訳, 参照.
- (13) José Ortega y Gasset, Obras Completas Tomo I, Madrid: Alianza Editorial, 1983, p. 322, Meditaciones del «Quijote» (1914).  
オルテガ, A. マタイス・佐々木孝訳『ドン・キホーテに関する思索』26 ページ, 現代思潮社, 1968 年.
- (14) Henri-Frédéric Amiel, Journal Intime, Edition intégrale publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Philippe M. Monnier, Tome Second Janvier 1852-Mars 1856, Texte établi et annoté par Philippe M. Monnier avec la collaboration de Pierre Dido, Lausanne: L'Age d'Homme, 1978, p. 295, Dimanche 31 Octobre 52.  
ホフマンスタール, 檜山哲彦訳『チャンドス卿の手紙 他十篇』岩波文庫,



1991 年, 129 ページ-130 ページ, 詩についての対話, ガブリエルの言葉.

## 文 献

本文中で引用, 紹介した文献, 注に見られる文献のほかに, ここではつぎの若干の文献を加えたいと思う.

ミストラル, 杉富士雄訳『プロヴァンスの少女——ミレイユ——』岩波文庫, 1977 年.

和辻哲郎『風土 人間学的考察』岩波文庫, 1979 年 (初版の刊行は 1935 年).

O. F. ボルノー, 高橋義人訳・解説『デュルタイとフッサール——20 世紀哲学の源流——』岩波書店, 1986 年.

Edited by Maurice Natanson, Phenomenology and the Social Sciences volume 1, Evanston: Northwestern University Press, 1973.

Gila J. Hayim, The Existential Sociology of Jean-Paul Sartre, Amherst: University of Massachusetts Press, 1980.

The Phenomenology of Edmund Husserl Six Essays by Ludwig Landgrebe, Edited with an Introduction by Donn Welton, Ithaca & London: Cornell University Press, 1981.

Joseph J. Kockelmans, Heidegger on Art and Art Works, Martinus Nijhoff Publishers, 1985.

---

山岸 健『風景的世界の探究 都市・文化・人間・日常生活・社会学』慶應通信, 平成 4 年.

山岸 健『風景とはなにか 都市・人間・日常的世界』NHK ブックス 673, 日本放送出版協会, 1993 年.

Takeshi Yamagishi, Landscape and the human being (Translated by Ayako Kano), Human Studies 15, 1992.

山岸 健「日常的世界の光景——風景・SENS・人間——」慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第 36 号, 1993 年.

---

## <エピグラフ>

セザンヌ～本文中の文献, ガスケ『セザンヌ』180 ページに見られる言葉.

ハイデッガー～注, (7) の文献『ハイデッガー全集 別巻 1』138 ページ, Martin Heidegger, Acheminement vers la Parole, Paris (Gallimard, Classiques de la Philosophie) 1976, S. 7-8.